

箕輪遺跡

箕輪町公共下水道事業終末処理場沈澱池増設工
事に伴う埋蔵文化財第10次緊急発掘調査報告書

1997年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

箕輪遺跡

箕輪町公共下水道事業終末処理場沈澱池増設工
事に伴う埋蔵文化財第10次緊急発掘調査報告書

1997年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

序

本書は、箕輪町が行う公共下水道事業終末処理場の、施設の増設工事に先立って実施した、箕輪遺跡の第10次緊急発掘調査報告書であります。

箕輪遺跡は、町の南部に位置する低地帯に広がる大農耕遺跡で、郷土の発展に係わる重要な文化財の一つであります。この遺跡が注目されたのは、昭和26年に始まった大規模な土地改良工事中、稻作に使われた木製農具や多量の土器の出土と共に、記録にない水田跡の発見によるものであります。この事実にいち早く着目した郷土史研究家の、故小川守人氏と故小池修兵氏らによって遺物の採集が行われ、その全貌が明らかにされました。これは、郷土の歴史解明に一つの光をもたらしたものであり、両氏の多大な努力なくしては語ることのできないことであります。

町教育委員会が実施した本遺跡の緊急発掘調査としては、昭和55年～57年にかけての国道153号箕輪バイパスの建設に先立つ調査を皮切りに、今回で10回を数えることとなりました。そして、これまでの調査の積み重ねによって多くの成果を上げてきており、徐々に遺跡の謎が解き明かされつつあります。しかしその反面、度重なる開発により遺跡存続の危機も感じます。

調査結果につきましては、本書の中で詳細に記しておりますので、本書を広く活用していただければ幸いと存じます。

本書の刊行に当たり、この発掘調査にご指導ご助言をいただいた諸機関の方々や、またご協力いただきました調査関係者の皆様方に、心より感謝申し上げます。

箕輪町教育委員会

教育長 藤沢 健太郎

例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字三日町836番地6他に所在する箕輪遺跡の第10次発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、箕輪町教育委員会が行ったものである。平成8年9月2日から平成8年11月29日まで調査を実施し、平成9年3月21日まで整理作業及び報告書の執筆作業を行った。
3. 本書の作成にあたって、作業分担を以下のとおり行った。
遺構図の整理・トレース－垣内美保、根橋とし子、穂谷明子
遺物の実測・トレース－垣内美保、穂谷明子
押図作成－赤松　茂、池上賢司、根橋とし子、福沢幸一
写真撮影・図版作成－赤松　茂、池上賢司
4. 本書の執筆は、赤松　茂、根橋とし子が行なった。
5. 本書の編集は、赤松　茂、池上賢司、垣内美保、根橋とし子、福沢幸一、穂谷明子が行なった。
6. 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。広く活用されたい。

凡　　例

1. 遺構図は、次の縮尺とした。
平面図－1：50、1：100　　断面図－1：60
2. 遺物実測図及び拓影図は、次の縮尺とした。
陶器拓影図1：3、木器実測図－1：4、金属器－1：2、錢貨－2：3
3. 土器拓影図の断面のスクリーントーンによる表示は、陶器を表わす。
4. 土層及び土器の色調は、「新版　標準土色帖」を用いて記してある。

本文目次

序

教育長 藤沢 健太郎

例 言・凡 例

本 文 目 次

挿図目次・表目次・図版目次

第I章 発掘調査の概要	1
第1節 調査の経過	1
第2節 調査概要	2
第3節 調査日誌	3
第II章 遺跡の立地	5
第1節 自然環境	5
第2節 歴史環境	7
第III章 調査の結果	10
第1節 調査方法と結果概要	10
第2節 土層堆積状況	13
第IV章 遺構と遺物	15
第1節 検出遺構	15
第2節 出土遺物	19
第V章 まとめ	26

報告書抄録

図 版

挿 図 目 次

第1図 位置図.....	1	第8図 1号木杭列遺構.....	17・18
第2図 遺跡地地形分析図.....	6	第9図 出土木杭実測図1.....	20
第3図 周辺遺跡分布図.....	8	第10図 出土木杭実測図2.....	21
第4図 調査区設定図.....	10	第11図 出土木杭実測図3.....	22
第5図 全体図及びグリッド設定図.....	11・12	第12図 出土木杭実測図4.....	23
第6図 トレンチ土層断面図.....	14	第13図 出土金属器実測図、 陶器・錢貨拓影図.....	
第7図 1号畦畔状遺構.....	16		24

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表.....	9
第2表 出土木杭観察表.....	24

図 版 目 次

図版1 上空より遺跡地を望む	
図版2 調査地遠景（南西より）、調査地全景（東方より）	
図版3 トレンチ土層堆積状況、畦畔状遺構及び木杭列遺構	
図版4 畦畔状遺構、木杭列検出状況1	
図版5 木杭列検出状況2、木杭列検出状況3	
図版6 木杭列検出状況4、木杭打ち込み状況	
図版7 出土木杭1、出土木杭2	
図版8 出土木杭3、出土木杭4	
図版9 出土木杭5、出土木杭6	
図版10 調査協力者	

第Ⅰ章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経過

箕輪遺跡は、箕輪町の南部、JR飯田線木下駅南から南箕輪村北殿駅の北側に至る、天竜川の西岸の氾濫原一帯に広がり、その面積はおよそ100ヘクタールに及ぶとも言われる。現在、その土地利用の主体は水田耕作ではあるが、人口増加に伴い、宅地化、工場進出、公共施設の充実等による開発化傾向にある場所でもある。

町は、生活環境の改善と天竜川をはじめ町内を流れる河川及び水路等の水質浄化と汚濁防止を目的とした「箕輪町公共下水道事業」を平成17年度完了を目標に、平成元年より進めてきた。既に、字三日町城安寺地籍の用地内に、第1次計画分の施設が完成し、平成7年度から共用を開始している。町教育委員会はこの事業に先だって、平成2年の4・5月に用地全域のトレ



第1図 位置図

チ掘削による試掘確認調査を行い、遺構・遺物の埋没状況を把握した中で、最終沈澱池等付属施設に掛かる範囲の面的発掘調査を実施し、大きな成果を得ている。

平成7年度に入り、町下水道課から同事業の最終沈澱池等の増設計画の申し出を受けた町教育委員会は、前回の経過と実績を踏まえ、改めて同課と遺跡の保護協議を行なった。その結果、前回調査した箇所の南側に隣接する、工事予定用地約1,660m²を対象とした、記録保存を目的とする発掘調査を実施することで同意した。

そして本年、両者間での再協議により、8月23日に発掘調査の委託契約を結び、町教育委員会が新たに調査団を結成し、同年9月2日よりおよそ2ヶ月の予定で、本遺跡としては10次目の調査を実施することになった。

第2節 調査概要

- 1 遺跡名 算輪遺跡
- 2 所在地 長野県上伊那郡算輪町大字三日町836番地6他
- 3 発掘調査期間 平成8年9月2日～11月29日
- 4 整理期間 平成8年12月2日～9年3月21日
- 5 委託契約日 平成8年8月23日
- 6 事務局 教育長 堀口 泉（平成8年12月離任）
教育長 藤沢 健太郎（平成8年12月就任）
副参事 柴 登巳夫（算輪町郷土博物館館長）
副主幹 赤松 茂（同館学芸員）
主査 柴 秀毅（同館学芸員）
臨時職員 酒井 峰子、根橋 とし子、穂谷 明子
- 7 調査団
- 団長 堀口 泉、藤沢 健太郎
副団長 柴 登巳夫
担当者 赤松 茂
調査員 福沢 幸一、池上 賢司、根橋 とし子
調査団員 泉沢 徳三郎、井上 武雄、遠藤 茂、大槻 茂範、大槻 泰人、
垣内 美徳、春日 英美、片桐 勇、倉田 千明、桑原 鶴、
後藤 主計、小松 峰人、笹川 正秋、戸田 隆志、根橋 陽一、
藤沢 具明、伯耆原 正、穂谷 明子、堀 五百治、松田 實一、
水田 重雄、向山 幸次朗、山田 武志

第3節 調査日誌

- 9月2日（月）～5日（木） 調査準備。
- 6日（金）重機によるトレーニングの掘削、
及び表土除去作業を行う。
- 11日（水）調査開始。遺構上面確認作業
と、トレーニングの壁面削り作業
を終日行う。
- 12日（木）数本のサブトレーニングを設定し、
水田遺構の耕土面を探る。木
杭列の一部を検出した。
- 13日（金）サブトレーニング内で検出した、木杭列及び木杭列包含層上部の土砂の除去作業を行なう。
- 16日（月）雨天のため、室内作業。
- 17日（火）終日、木杭列包含層を覆う土砂の除去作業を行う。
- 18日（水）調査区の中央部に新たにサブトレーニングを設定し、掘削する。水田面の上面がほ
ぼ現れた。トレーニングの壁削り作業も終わりに近づく。
- 19日（木）トレーニングの分層作業と、再度水田遺構上面の清掃作業を行う。また、写真撮影
の準備として、ローリングタワーの設営と、検出遺構の白線引きも行なう。
- 20日（金）写真撮影のための最終清掃を実施したが、悪天候のため撮影を明日に延ばす。
- 23日（月）雨天のため、室内作業。
- 24日（火）午前は写真撮影の準備をし、昼頃撮影を行う。午後は畦畔状遺構の平面測量と、
木杭列平面測量の準備として、メッシュ設定の基準点打ちを行う。基準点から
の標高移動を行い、調査区内
にベンチマークを落とした。
- 25日（水）木杭列の平面測量と、全体平
面測量を実施する。
- 26日（木）悪天候のため、全体平面測量
の続きをを行い、終了した。
- 27日（金）木杭の掘り出しと、木杭の打
ち込み状況を確認するための
サブトレーニング掘削作業を行う。



また、崩れたトレンチの壁を
再度削る。

30日（月）雨天のため、室内作業。

10月1日（火）終日、木杭の掘り出しとトレンチの壁削りを行う。

2日（水）木杭の掘り出しを行う。トレンチ壁面の土層断面測量と写真撮影も行う。

また、一部道具の撤収を始める。

3日（木）木杭の掘り出し作業により、新たに出土した木杭の平面測量の補足を行う。

4日（金）全体平面測量の補足作業と、土層観察及び注記作業。木杭の取り上げを行った。

本日にて調査を終了する。

11月29日（金）調査地の埋め戻しを行った。



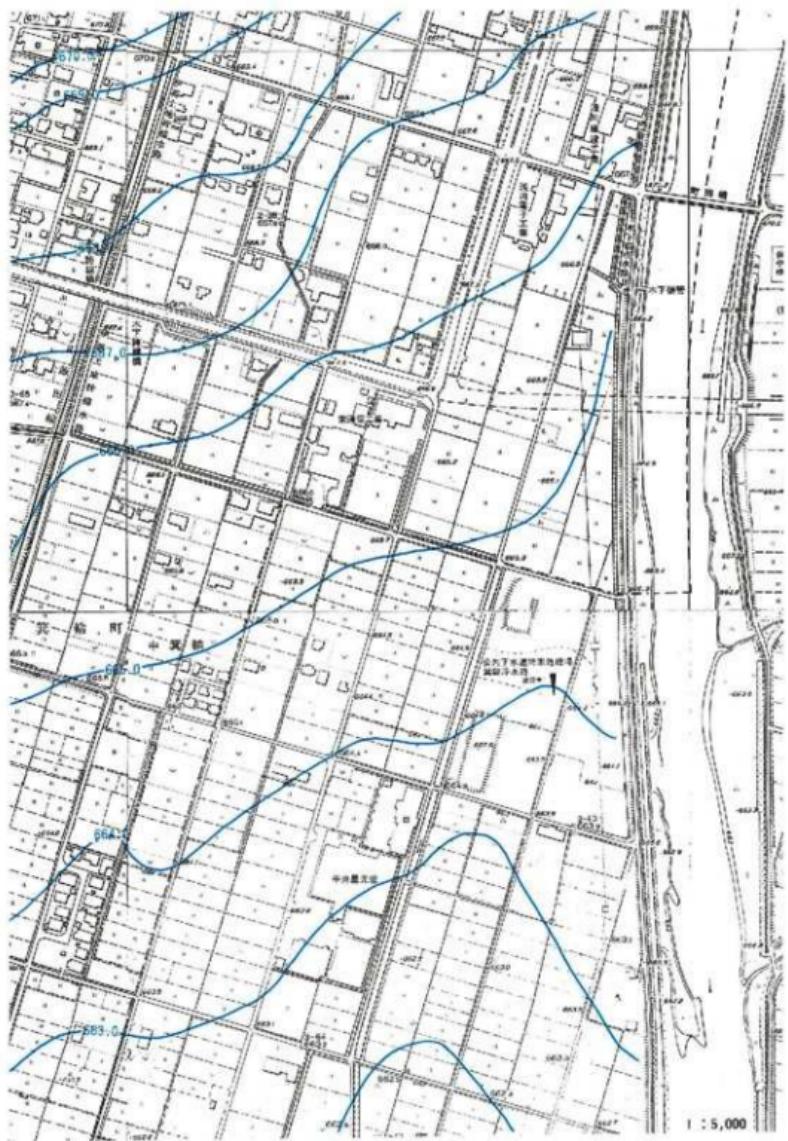
第II章 遺跡の立地

第1節 自然環境

箕輪町は、西は木曾山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の北方にあり、諏訪湖を源とする天竜川が、町のほぼ中央を東西に二分するように南流している。天竜川西岸に発達した広大な扇状地は、木曾山系の山々から天竜川に流れ込む中小河川によって形成された複合扇状地である。北から、北の沢川、桑沢川、深沢川、帶無川、大泉川、小沢川と続き、南ほど流路が長くなっている。それは、西側の山々が北から南にかけて高さを増しているためで、その流路に比例して山麓に形成される扇状地の規模も大きくなっている。扇状地における地質構造は、ローム層とその下の砂岩・粘板岩を主とする円礫層・砂層で構成されている。天竜川はその末端部を南流し、流路に沿って河岸段丘を作り上げている。段丘の突端部は、天竜川や中小河川の氾濫による水害を受けにくい東側に面する緩やかな傾斜地である。段丘下には、扇頂部や扇中央より地下に浸透した地下水が伏流水となって天竜疊層と沖積層の境に湧き出る湧水が多く、扇状地を流れる小河川の水利と合わせ、豊かな水源に恵まれている。

段丘崖下には、天竜川の氾濫原がみられ、北から南に向かってその幅が広がっていく。遺跡は、JR飯田線木下駅の南側から南箕輪村北殿駅にかけて、川の西岸に広がる氾濫原内に存在する。ここは、およそ100ヘクタールに及ぶ面積の低地で、木下の北を東流する帶無川がある時期に激しく活動して天竜川を東側に押したために、段丘崖と天竜川の間にこのような低地が形成されたのであろう。昭和27年頃から実施された土地改良事業以前には、段丘崖下や扇端部を中心に入れたところに湧水や沼地が存在し、一帯が保濕性の非常に強い低湿地帯であったことがうかがえる。縄文時代の末期から弥生時代中期の初め頃に東海地方から伝わったと考えられる米作りの技術は、良質な土壤と低湿性からいち早く定着したのだろう。

次に遺跡内の地形の起伏状況を概観してみると、過去に天竜川が決壊したと思われる場所から、古川と呼ばれていた旧河道が確認できよう。そして、旧河道の西側に平行して自然堤防と考えられる帶状の微高地が存在する。また、その西側に広がる比較的安定した低地が後背湿地であると予想される。



第2図 遺跡地地形分析図

第2節 歴 史 環 境

箕輪町は、天竜川を挟んで典型的な河岸段丘と扇状地で形成された地形で湧き水にも恵まれ、先史より人が居住し易い格好な所といえる。町内には、そんな原始・古代人たちが残した足跡ともいいうべき多くの遺跡が存在し、現在のところ包蔵地176ヶ所、古墳24基が確認され、上伊那郡内においても屈指の遺跡地帯として知られている。その多くが、河岸段丘上及び扇状地に立地しているのに対し、箕輪遺跡は天竜川の氾濫原に所在している。

本遺跡が世間に注目されるようになったのは、昭和27年から20年にかけて行なわれた土地改良事業によって多量の遺物が出土したことによるものである。惜しくも土地改良事業中といふこともあり、発掘調査の実施までには至らなかったが、その状況は箕輪史研究会によって克明に記録され、多くの出土遺物は地元郷土史家の小池修兵・小川守人両氏（故人）によって収集保存されている。今日、本遺跡の存在は両氏の多大な努力なくしては語れないところである。遺跡は、箕輪町から南箕輪村にまたがり総面積が100ヘクタール以上と考えられ、大清水・小清水・苦谷・馬場・御室田・鍛冶屋垣外・城安寺・穴田・渋田・曾根田・久保下等の多くの小字によって区分されよう。出土遺物は、縄文中・後・晚期土器をはじめ、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中・近世陶磁器まで時代の幅がみられる。また、田舟、田下駄、木製鋤・鋤などの農機具の他、矢板や數万本に達すると思われる木杭が出土しており、水田耕作を裏付けるものと言えよう。更に注目されるのは、大清水地籍から出土した木製人形・馬形・木串や、御室田地籍より多量に出土した高環を中心とする弥生土器、土師器などで、水田經營に關係するであろう祭祀的遺構の存在が明らかに予測される。しかし、これらはあくまでも土地改良工事による出土の遺物であり、どの遺物がどんな状態で、かつ層位的な出土が確認できたかはまったく不明であり、大きな発見は更に新しい疑問と課題を残すこととなった。

発掘調査としての成果は、昭和55～57年の三年間に実施した国道153号線の箕輪バイパス工事に伴う発掘調査を皮切りに、以後6次に渡る発掘及び試掘調査を行ってきた。特に、昭和55～57年で実施した国道153号線の箕輪バイパス工事に伴う調査では、木杭を打ち込んだ杭列畦畔で、区画を方形に造作した水の出入口を伴う水田跡と、道路跡と思われる施設の存在も確認された。平成5年度に行った国補橋梁整備事業に先立つ調査では、杭群によって側溝状の枠を形成し、流路を固定した水路状遺構と、杭列畦畔の水田跡の構成が確認されている。また大きな試みとして平成2・5年には、従来の調査に並行して、プラントオパール分析による科学的調査を取り入れた。それにより、水田耕作層の確定と層位による面的調査が実施でき、各層位ごとの遺物包含状況との対比による時期判定をより明確化することができるようになった。このことは、今後の調査への方向性を示す、一つの基準として大きな役割を持つこととなった。



第3図 周辺遺跡分布図

尚、昭和58年には、南箕輪村との境にある田中城址跡周辺の試掘調査を行なったが、城郭遺構を推定できるようなものは確認されなかった。

次に本遺跡周辺の遺跡分布状況は、西方にみられる段丘上に連なる遺跡群と天竜川東岸にみられる段丘上にみられる遺跡群とに分けて概観してみる。

まず前者では、北より上の林（3）、北城（4）、南城（5）、猿楽（6）、天伯（9）と続く、各遺跡で発掘調査が行なわれ、鉄文、弥生、平安時代の集落址の一端を探ることができた。特に、北城遺跡からは、17軒に及ぶ弥生時代後期の住居址群を確認し、南東に広がる水田經營が行なわれた箕輪遺跡との関連性が大いにうかがえる。古墳時代としては、町内にも後期を中心とした古墳が築かれるようになるが、段丘上での集落遺跡の数がまだ多く確認されていない。箕輪遺跡からは、本時代の遺物出土例も多いことから、段丘下の小段丘や、扇状地端部などの微高地にその存在が隠されているのかもしれない。平安時代になると、北城遺跡を代表に、段丘

上への居住が再開されるようになる。それはこの地域のみならず、各地で遺跡数が増加することから、当時の社会的大きな変革により、人口の増加による集落域の拡大が推測できる。

次に後者についてであるが、北より澄心寺下(14)、御射山(13)、上金(18)、福与大原(19)の各遺跡で発掘調査が行なわれ、出土した多くの遺構・遺物から、縄文時代は早・前・中期に、更に弥生・古墳・平安の各時代と、この地一帯が居住域としての役割を果たしていることがわかった。特に、澄心寺下遺跡からは、古墳時代中期の祭祀的遺物を伴う住居址が検出され、また北垣外遺跡(16)からも、同時期の既出遺物が確認されている。

以上、本遺跡とそれを取り巻く各遺跡について概観してきたが、生産地と集落とを直接結び付けるものは未だ謎のままである。しかし、両者の関連性を常に考慮した上で、郷土の原始・古代の様子をみつめていく必要がある。

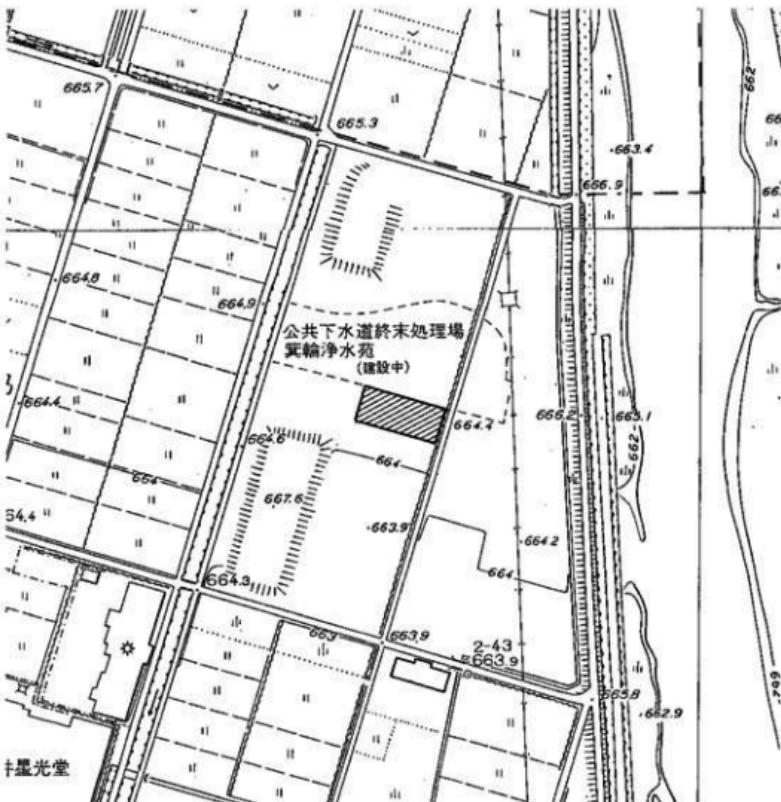
第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	地籍	立地	時代					備考
				旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	
1	箕輪	三日町木下 塙ノ井	平地	○	○	○	○	○	昭和55～58年、平成2・5 年発掘調査
1-A	田中城跡	三日町	平地					○	昭和58年発掘調査
2	藤山	松島	段丘	○					
3	上の林	木下	段丘	○	○		○		昭和55・57年、平成2・4 年発掘調査
4	北城	木下	段丘		○		○	○	昭和52年発掘調査
5	南城	木下	段丘	○			○	○	昭和51年発掘調査
6	猿楽	木下	段丘		○			○	昭和49年発掘調査
7	向垣外	塙ノ井	段丘	○	○	○	○		
8	山の神	塙ノ井	段丘	○	○				
9	天伯	塙ノ井	段丘	○	○		○		昭和42年発掘調査
10	内城	北殿	段丘	○		○			
11	上人塚	塙ノ井	段丘	○			○		
12	垣外	塙ノ井	段丘	○					
13	御射山	三日町	扇央	○			○		昭和54・55年発掘調査
14	澄心寺下	三日町	扇頂	○			○		昭和55年発掘調査
15	黒津原	福与	段丘	○					
16	北垣外	福与	扇央	○	○		○		
17	上金	福与	扇央	○			○		昭和61年発掘調査
18	福与大原	福与	扇央	○	○		○		昭和51～53年発掘調査
19	矢田尻	福与	扇央	○					

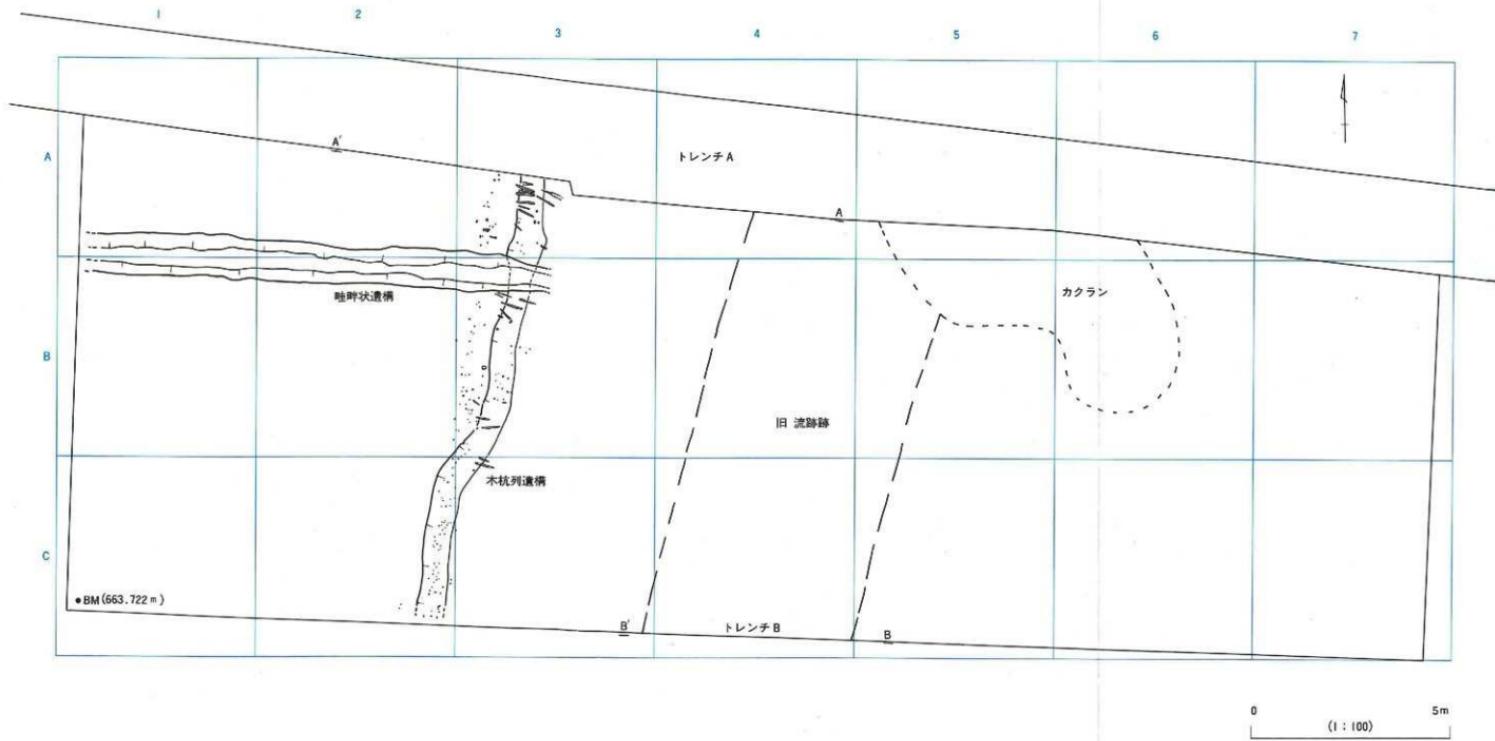
第III章 調査の結果

第1節 調査方法と結果概要

今回行った調査箇所は、遺跡地の東部、天竜川の堤防に隣接する所である。平成2年度の調査箇所の南側隣接地であるため、開発予定面積1,660m²の工区全域を調査対象とした。当時は、まだ水田の区画がはっきり残っていたが、一帯の現況が処理施設予定用地として、造成が既に



第4図 調査区設定図 (1 : 2,500)



第5図 全本図及びグリット設定図

行われており、前回検出した遺構の位置やその継続状況がわからぬため、トレンチの掘削による堆積土の状況をまず調べることが先決であった。トレンチは、調査範囲の北側にほぼ東西方向に設定し、遺構の有無に関わらず大型バックホーにて1.5から2m幅で、基盤層の砂礫層まで掘削した。

掘削の結果、基盤層までの深度と土層堆積状況に違いがみられた。これは、前回の調査結果からもおおむね予測していたことであるが、前回と大きく違う点は、既に上層部が削平及び造成がされていたり、部分的に深く掘削がされた状況が見られた。特に、トレンチ内の層序を確認するための北壁側は、その状況が顕著にみられたため、層序の線引きと記録作業ができず、トレンチの南壁と調査区南側サブトレンチとの併用した記録（第6図）により、現地表面から遺構面を確認した。尚、土層の線分けと観察は、新版標準土色帖（著・編者 小川正忠、竹原秀雄）を用い、過去のデータを参考にし、できるだけ客観的な視野に努めた。

続いて、およよその層序の確認をした後、前回行ったプラントオバール分析による水田土壤の可能性が高く、比較的堆積状況の安定している1層を限定して面的調査をすることとし、そこに到達するおよそ10～20cmを残した土砂を大型バックホーで除去した。それから手作業による遺構面の検出作業→木杭列遺構の検出作業→写真撮影及び平面・断面測量等の記録作業、の手順で進めた。

グリッドは、2m四方で方位に併せて任意に設定し、南北方向は北からアラビア数字を、東西方向は西からアルファベットを用いて標記した。また、調査区南方約200mに位置する水準点（2-43）から標高移動を行い、調査区内の南西隅にベンチマーク（663.722m）を任意に設定した。

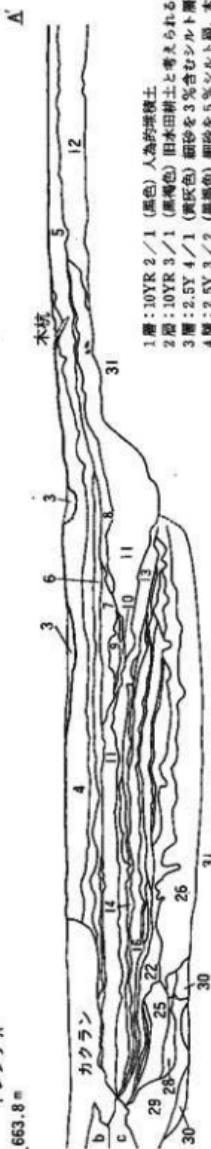
検出遺構

- ・畦畔状状遺構（4層水田面上部）
- ・木杭列遺構（4層水田面）

第2節 土層堆積状況

今回の調査地は、平成2年度に実施した第7次調査地点に隣接し、想定される自然堤防の外部に位置する点で共通の地形環境の特徴を有する。特に、基盤層（礫層）の確認地点に高低差があり、トレンチの掘削状況からも確認済みである。中でも窪地（低地）となる箇所が、旧河道の一部と考えられる。その窪地は地下水位が高く、灰色または青灰色シルトを主体とする、ヨシなどの有機質を多量に含む堆積土が重層し、プラントオバール分析結果では、本調査区第4層にイネの数値が得られ、水田耕土層としての可能性が高い（第6図）。

トレンチ A
A 663.8m



1層: 10YR 2 / 1 (黒色) 人为的堆積土
2層: 10YR 3 / 1 (黒褐色) 旧水田耕土と考えられる。
3層: 2.5Y 4 / 1 (黄褐色) 細砂を3%含むシルト層。
4層: 2.5Y 3 / 2 (黒褐色) 細砂を5%シルト層。木
折が包含される水田堆積の耕土層。部分的に酸化
鉄を含み赤褐色を帯びる。
5層: 10YR 4 / 1 (褐色) 細砂を10%含むシルト層。
6層: 2.5Y 3 / 2 (暗赤褐色) 細砂を30%、植物根を
5%含むシルト層。
7層: 2.5Y 3 / 2 (暗赤褐色) 細砂を30%、食むシル
ト層。

8層: 5 Y 3 / 2 (オリーブ黒色) 細砂を20%、化物を3%
含む粘土層。
9層: 5 Y 4 / 1 (灰褐色) 細砂を20%、化物を3%
含む粘土層。

10層: 5 Y 4 / 1 (灰褐色) 細砂を20%含む粘土層。
11層: 5 Y 2 / 2 (+リープ黒色) 粘土層。
12層: 2.5Y 3 / 1 (深灰色) 細砂、粘土の混合層。
13層: 5 Y 4 / 1 (灰褐色) 粘土を20%、粗砂を80%含
む粘土層。

14~22層: 2.5Y 3 / 2 (黒褐色) から5 Y 4 / 1 (灰
色) を主体とした、細砂・細砂を20%含む粘土の
混合層。

23~30層: 2.5Y 2 / 1 (灰褐色) から2.5Y 3 / 1 (黑
褐色) を主体とした、粘土及び泥水等を10%以
上含む粘土と細砂の混合層。

31層: 新樹 (基盤層)
a~c層: 10YR 3 / 1 (黒褐色) 旧河運の堆積耕土層。

0 (1 : 60) m

第IV章 遺構と遺物

第1節 検出遺構

1. 畦畔状遺構（第7図）

調査区のA-1～3、B-1～3グリッドに位置する。層序でみると、4層直上に存在する土手状の独立層である。ほぼ直線状でN-110°-E方向に走り、長さは12mのみの検出である。調査区の西方にその継続性が確認できたが、本遺構直下の4層に伴う木杭列遺構と切り合う箇所を境に、それより東方への遺構の確認はできなかった。

幅はほぼ一定で、0.9～1.1mを測る。高さは、10cm前後の低い盛り上りで、断面形は「かまぼこ状」を呈する。また、杭などによる補強はされていない。

本遺構は、上記の内容からみて、直下層の土を盛り上げたものではなく、人為的に土を搬入してきて構築された、単独遺構と思われる。また、本遺構と類似するものは、平成2年度に実施した第7次調査でも検出され、「寛永通宝」等近世の遺物を包含している。しかし、規模・形状及び形成される堆積土等の諸特徴に共通する点が多いが、遺構が走るその方向に大きな違いがみられる。トレンチでの土層観察では確認できなかったが、両遺構の関連性の強い、同一時期に存在した水田を区画した畦畔状遺構であることを示唆したい。

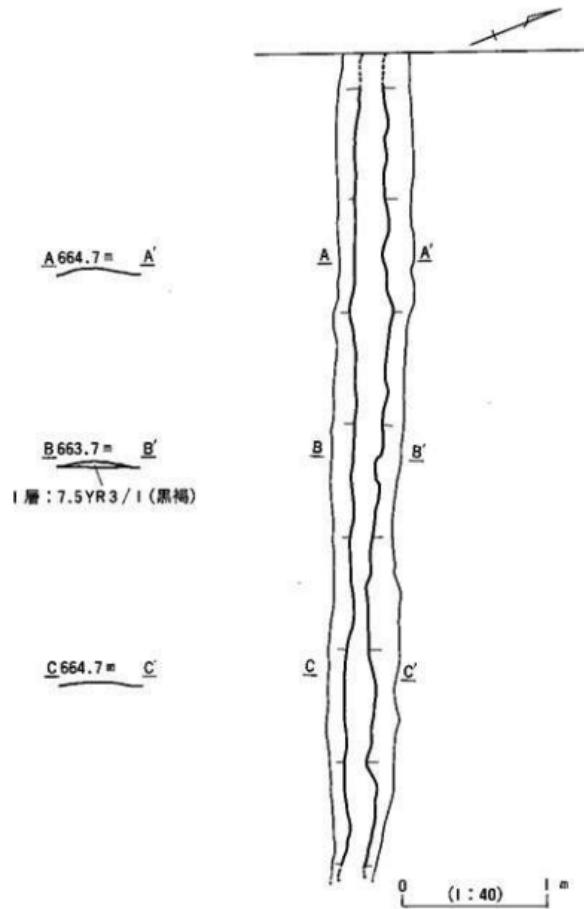
尚、遺物は出土していない。

2. 木杭列遺構（第8図）

第4層に伴う木杭列遺構でA-3、B-3、C-2・3グリッドに位置する。調査区内では、11.5mの検出であったが、その方向はN-36°-Eで、第7次調査で検出した水田遺構に伴う木杭列遺構と大きな変化はみられない。また今回の調査では、トレンチ内の擾乱が激しいため、土層堆積の対比は余りできなかったが前回の土層観察データとの共通点も多く、前回検出した木杭列遺構の継続遺構として捉えた。

今回も、木杭の集中する箇所には、5～10cmの段部が、縁ほど杭が斜方向ないし杭を寝かせた状態で打ち込んでいる。打ち込む方向も、段部の円にほぼ垂直に打ち込まれる杭列の一群が確認できたが、列を意識したというより、むしろ主体となる縁部の木杭列の補強を目的としたものと思われる。

これらの状況も、前回検出した木杭列の諸特徴とほぼ一致する。軟弱な地盤に対して段を形成し、それを強固にするためのものと考えられるが、南北に連なる湿地帯のほぼ縁に当たる位



第7図 1号咲咲状遺構



第8図 1号木杭列造構

置に一致することから、地形的な作用による特異な例であるとしかいえない。

これらの状況から考えて、杭列を伴う段部は本水田遺構の畦畔的な施設として捕らえるのが妥当と思われるが、不明な点もまだ多く、あくまでも今回の検出は広大な水田遺構の一部を新たに確認したに過ぎず、遺構の全体像はつかめなかった。

出土遺物は木杭が主体である。土師器、須恵器、陶磁器等の土器片も誰かながら出土している。

第2節 出土遺物

1. 木 器 (第9~12図)

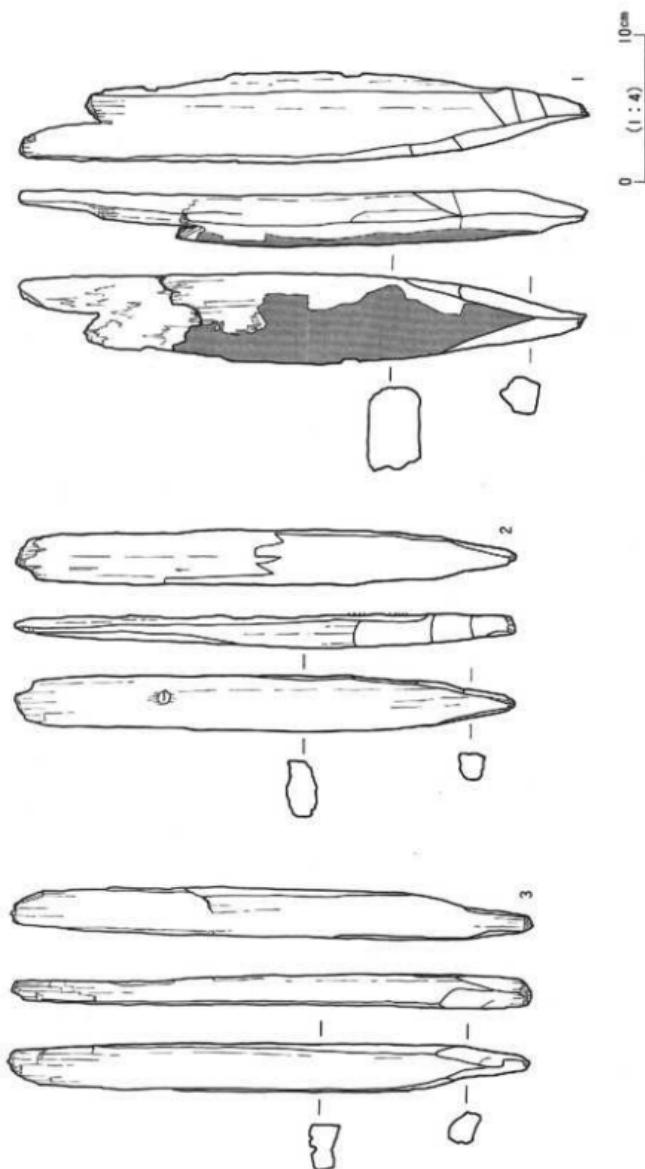
第4層に伴う木杭列遺構を形成する、木杭のみの出土である。総数が180本前後であったが、腐食の進んだものがほとんどである。比較的腐食の少ないものも、頭部の風化や破損が著しい。尚、材質は、すべてサワラが用いられている。

木杭は、打ち割り法による木取り作業によって得られた断材を主に使用している。まず玉切りした丸太をみかん割りによって大割り→小割りをし、そして小口が三角形となるその素材ができる。直徑が5 cm以上の丸太を割採した割合、小割りした素材が、更に木目に添って薄く削ることによって角材の杭となり(1~5)、そして直徑がおよそ5~3 cmの細目の丸太を割採した場合は、大割りもしくは小割りした素材そのものが杭となる(2~11)。またそれ以下のものは、小割りのできない枝部と思われる丸材をそのまま用いる(12)。丸または角材の杭の中には、1のように側面を炭化させたものも確認された。

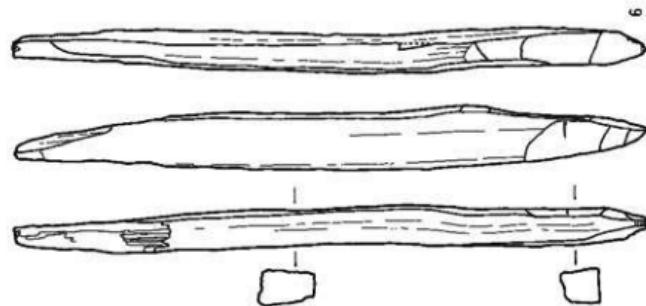
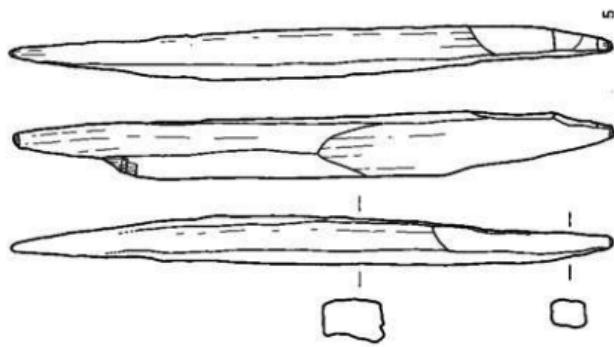
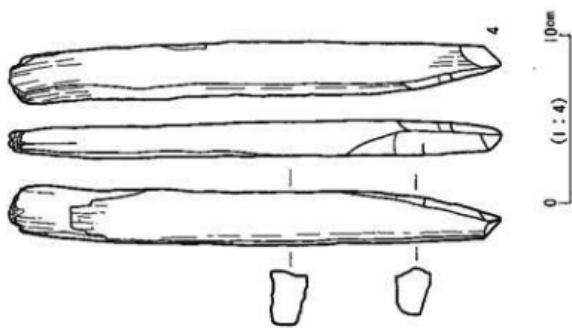
次に、尖端部の加工状況について若干の観察結果をまとめたい。尖端部の作出は、小口の稜部もしくは小口が長方形となる両短側面に、斧または鉈などの刃身が偏平でかつ鋭利な刃部を有する鉄製工具で削られ、杭の軸に対して比較的浅い角度から打撃が加えられる。一加工面に対する入刃回数は、細身の杭は1~3回程度、太めの杭で3~7回程度であり、削り出された加工面には入刃の切り合い状況を示す稜が明瞭に確認できる。

2. 土器類 (第13図1)

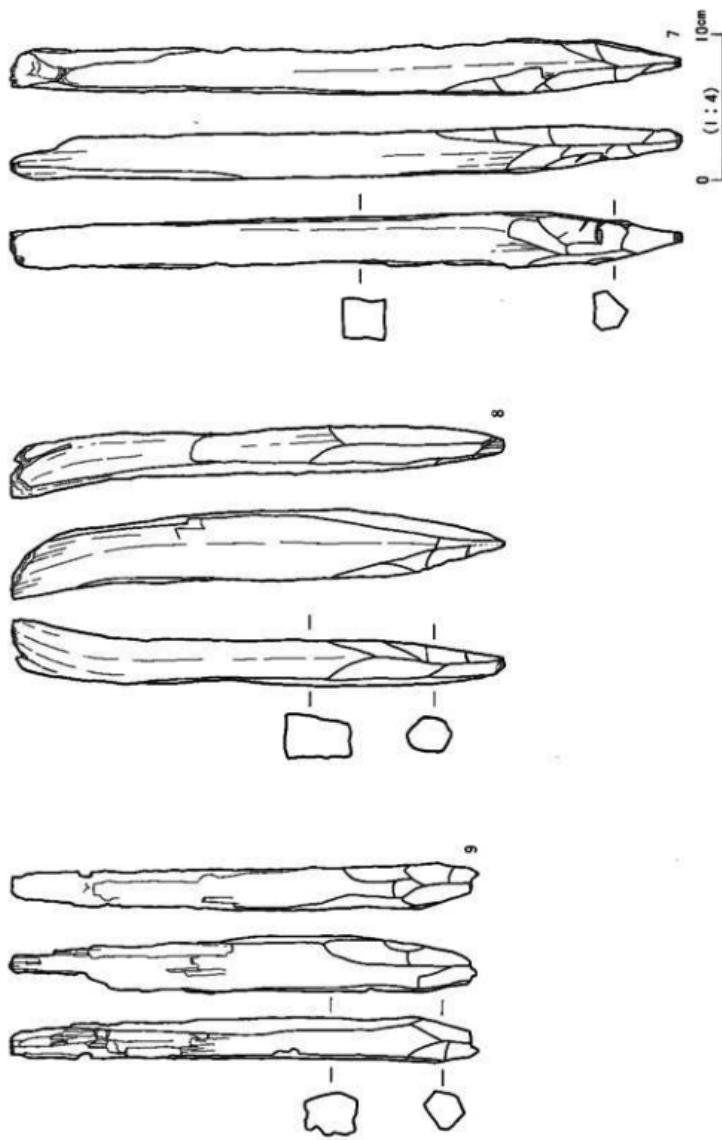
出土した土器類はすべて小破片で、土師器4点、須恵器8点、土師質土器10点、磁器9点、陶器15点の、総数46点になる。土器類のはほとんどが、第4層検出時における直上層の除去作業中に出土したものであり、各時代の土器類がかなり混在している。須恵器は、古墳時代後期及び平安時代のものが確認でき、土師質土器は内耳土器がその主体である。陶磁器は、近世後半から近・現代に至る瀬戸美濃産または在地産と思われる陶器の碗、皿、鉢、染め付けまたは瀬戸物と呼ばれる磁器片である。また、全体的に各片の風化が目立ち、図化できるものは瀬戸美



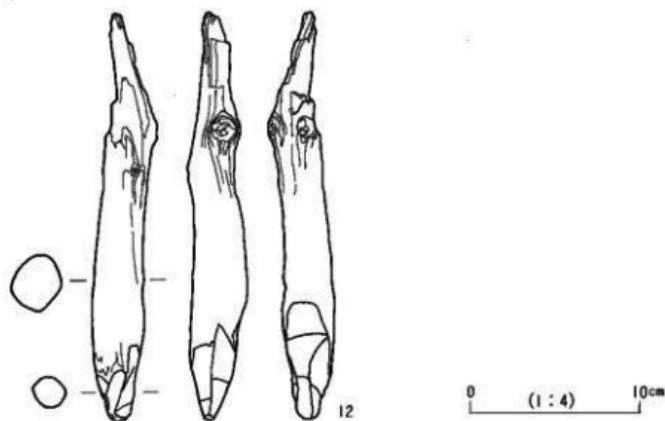
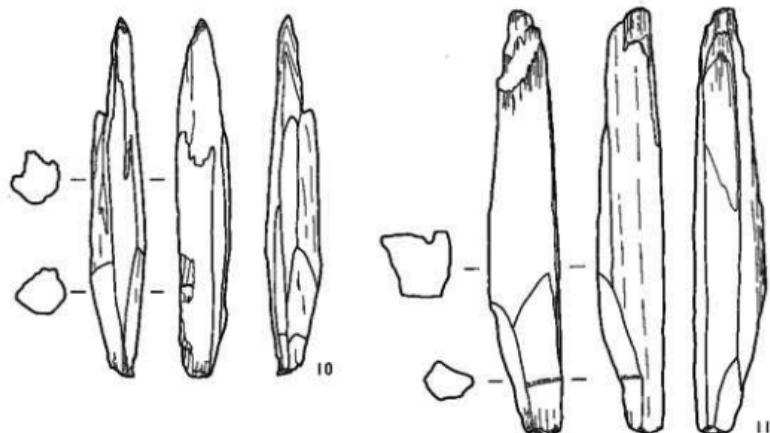
第9図 出土木杭実測図 I



第10図 出土木杭実測図 2



第11図 出土木杭実測図 3

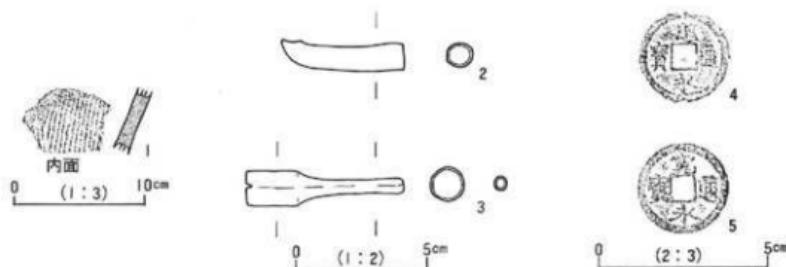


第12図 出土木杭実測図 4

第2表 出土木杭観察表

(長さ・幅・厚さの単位はcm、重さの単位はg)

番号	出土地点	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	木取り	先端部の加工状況
1	木杭列遺構	サワラ	40.6	6.0	3.8	390	小割り	小口-長方形 先端-刃物による多方面加工
2	木杭列遺構	サワラ	35.6	4.0	2.3	190	小割り	小口-長方形 先端-刃物による側面加工
3	木杭列遺構	サワラ	37.3	3.4	2.2	140	小割り	小口-長方形 先端-刃物による多方面加工
4	木杭列遺構	サワラ	35.0	3.9	2.5	290	小割り	小口-台形 先端-刃物による側縁加工
5	木杭列遺構	サワラ	43.7	3.5	4.5	255	小割り	小口-台形 先端-刃物による側面加工
6	木杭列遺構	サワラ	45.0	2.5	4.1	270	小割り	小口-台形 先端-刃物による多方面加工
7	木杭列遺構	サワラ	47.8	3.0	3.1	330	小割り	小口-正方形 先端-刃物による多方面加工
8	木杭列遺構	サワラ	35.1	3.2	4.8	225	小割り	小口-正方形 先端-刃物による多方面加工
9	木杭列遺構	サワラ	33.5	3.0	3.5	180	小割り	小口-正方形 先端-刃物による多方面加工
10	木杭列遺構	サワラ	25.6	3.9	3.6	130	小割り	小口-正方形 先端-刃物による多方面加工
11	木杭列遺構	サワラ	30.3	5.0	4.7	320	小割り	小口-台形 先端-刃物による多方面加工
12	木杭列遺構	サワラ	29.0	3.9	3.9	170	玉切り	小口-円形 先端-刃物による多方面加工



第13図 出土金属器実測図、陶器、銭貨拓影図

溝塗のすり鉢（1）1点のみであり、特に土師器の諸特徴をつかむことができなかつた。

3. 煙管（第13図2・3）

雁首部及び吸口部が各1点づつ出土しており、すべて銅製である。2の雁首は、首部の脂返しが大きく湾曲する、いわゆる「河骨形」と呼ばれる形態をとるもので、火皿は欠損する。銅板を管状にした際の接合部は観察できない。3は、肩部を持たない吸口部で、先端でやや膨らみを有する。銅板を丸めて管状にした際の接合部が残る。尚、2点とも第4層直上層からの出土である。

4. 銭貨（第13図4・5）

2点の寛永通宝が、第4層直上層からの出土している。

第V章　まとめ

箕輪遺跡は、町教育委員会では、昭和58年に本遺跡の発掘調査を開始して、今回で第10次を数えるに至った。また、平成4年度には今回の調査に先立ち、南箕輪村塙ノ井中田地区において、同教育委員会による過去最大の面積となる発掘調査が実施され、多大な成果が得られている。

今回の調査は前述のとおり、平成2年度に実施した、本遺跡の第7次調査結果とほぼ同じであり、前回検出した各遺構の継続性を確認できた以外は、大きな新発見はなかった。各遺構は、更に南へ埋没し、今後予定される同開発事業の実施増設工事に先立ち、その状況が改めて明らかとなるだろう。何れにしても、今後の調査研究の積み重ねが、本遺跡の知られざる多くの謎を解き明かしてくれることを熱望するものである。

昭和26年に始まった土地改良事業を契機に、地元郷土史研究者の故小川守人、故小池修兵の両氏による地道な調査・研究の積み重ねによって、本遺跡が学術的見地で注目を集め、県内ではいち早く周知されてきた。また両氏の残した当時の記録や採集した廃出遺物が、今日調査を実施する上で最も重要な資料となっており、両氏の功績なしでは箕輪遺跡を語る事はできない。しかしながら、限られた範囲、期間での調査に加え、担当側の技術的な問題や湧水の対処など、まだ多くの課題を抱えてはいるが、度重なる調査を通じての経験と反省により僅かながらも前進しているといえる。それもその機会を与えてくれる遺跡の存在なくしては、すべては何も始まらないのである。箕輪遺跡の保護・保存に向けて、着実に進んでいる開発の波に対し、今後どのような活動と対策が必要なのか、遺跡が跨る南箕輪村との相互協力を基に、一貫した歩調でその問題に取り組んでいかなければならない。生産技術の向上と水利及び地盤の整備によって安定した収穫が得られる今と比べ、土地改良以前の時代の米作りは、より厳しい自然環境の下で営まれてきた。様々な悪条件の中、我々の祖先たちの米作りに対する執念と思い入れが、出土したあのおびただしい数の杭の中に、凝縮しているのであろう。

末筆となりましたが、調査の進行及び本報告書作成にあたり、数々のご指導、ご協力を賜りました各関係機関並びに調査団の皆様方に、この報告書の刊行を持ちまして厚く御礼申し上げます。

参考引用文献

- | | | |
|-------------------------|------|---|
| 浅野猪久夫 | 1982 | 木材の辞典 朝倉書店 |
| 岡本省吾他 | 1977 | 原色日本樹木図鑑 保育社 |
| 飯田市教育委員会 | 1988 | 「恒川遺跡〈田中・倉垣外他篇〉」 |
| 大場磐雄 | 1964 | 「上伊那郡箕輪町発見の祭祀遺物」伊那路 8-1 |
| 上伊那誌刊行会 | 1965 | 長野県上伊那誌 歴史編 |
| 上郷町教育委員会 | 1989 | 「一丁田・ヒエ田遺跡」 |
| 小池修兵 | 1958 | 「箕輪遺跡第3回の報告にかえて」伊那路 2-5 |
| 古泉 弘 | 1985 | 「江戸の街の出土遺物」季刊考古学第13号 |
| 古泉 弘 | 1990 | 「江戸を掘る」柏原房 |
| 静賀市立登呂博物館 | 1986 | 「木の文化—古代木匠たちの伝説」 |
| 柴 登巳夫 | 1982 | 「箕輪遺跡出土の人形」伊那路26-3 |
| 柴 登巳夫 | 1985 | 「弥生時代の箕輪」伊那路27-6 |
| 柴 登巳夫 | 1986 | 「箕輪町の遺跡と遺物—沖積面の遺跡」箕輪町誌 歴史編 |
| 高橋 学 | 1989 | 「埋没水田遺構の地形環境分析」第四紀研究27-4 |
| 高橋 学 | 1990 | 「発掘調査のための地形環境分析」帝京大学山梨文化財研究所所報10号 |
| 長野県史刊行会 | 1981 | 長野県史 考古資料編 全1巻(1) 遺跡地名表 |
| 長野県史刊行会 | 1985 | 長野県史 考古資料編 全1巻(3) 中・南信版 |
| 長野県史刊行会 | 1988 | 長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物 |
| 長野市教育委員会 | 1989 | 「石川条理遺跡(4)」 |
| 中村 浩 | 1981 | 「和泉陶邑窯の研究」柏原房 |
| 奈良国立文化財研究所 | 1980 | 「層位・遺跡断面等の剥ぎ取り転写法」埋蔵文化財ニュース28 |
| 日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡考古学会 | 1988 | 「日本における稻作農業の起源と展開」日本考古学協会設立40周年記念シンポジウム |
| 藤沢宗平 | 1954 | 「箕輪遺跡にみる農業と文化」農業信州 |
| 藤沢宗平 | 1955 | 「長野県上伊那郡箕輪遺跡について」信濃7-2 |
| 南箕輪村教育委員会 | 1993 | 「箕輪遺跡 上伊那郡南箕輪村塩ノ井中田地区」 |
| 箕輪史研究会 | 1954 | 「箕輪遺跡報告」箕輪史研究資料第2集 |
| 箕輪史研究会 | 1954 | 「箕輪遺跡中間報告」箕輪史研究資料第3集 |
| 箕輪町教育委員会 | 1980 | 「箕輪遺跡」第1集 |
| 箕輪町教育委員会 | 1981 | 「箕輪遺跡」第2集 |
| 箕輪町教育委員会 | 1982 | 「箕輪遺跡」第3集 |
| 箕輪町教育委員会 | 1983 | 「箕輪遺跡」第4集 |
| 箕輪町教育委員会 | 1991 | 「箕輪遺跡」第5次 |
| 箕輪町教育委員会 | 1991 | 「箕輪遺跡」第6次 |
| 箕輪町教育委員会 | 1991 | 「箕輪遺跡」第7次 |
| 箕輪町教育委員会 | 1994 | 「箕輪遺跡」第8次 |

報告書抄録

ふりがな	みのわいせき						
書名	箕輪遺跡						
副書名	平成8年度町公共下水道事業終末処理場沈澱池増設工事に伴う埋蔵文化財第10次緊急発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
著者名	赤松 茂、根機とし子						
編集機関	箕輪町教育委員会						
所在地	〒399-46 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地 TEL. 0265-79-3111(代)						
発行年月日	1997年3月21日						
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村 遺跡番号	度分秒	度分秒		m ²	
箕輪	長野県上伊那郡箕輪町大字三日町 836番地 6他	98	7275 ～ 7278	35度 53分 32秒	137度 59分 36秒	19960902 ～ 19961129	1,660
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
箕輪	水田址	古墳、平安 中世、近世	畦畔状遺構 木杭列遺構		木杭、須恵器、土師器 陶・磁器、煙管、錢貨	平成2年に、 同開発事業に 先立つ緊急発 掘調査を実施 した箇所の南 側隣接地の調 査である。前 回出土した、 木杭列を伴う 水田遺構の繼 続状況が確認 できた。	

図 版



上空より遺跡地を望む

図
版
2



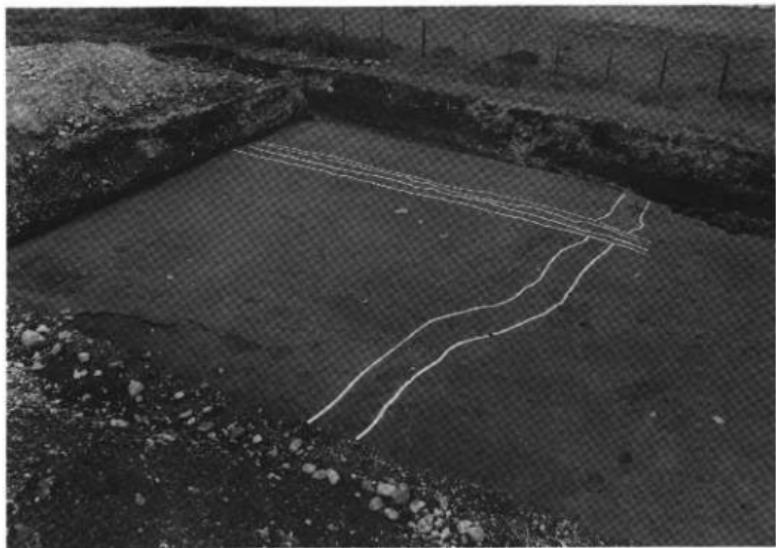
調査地遠景（南西より）



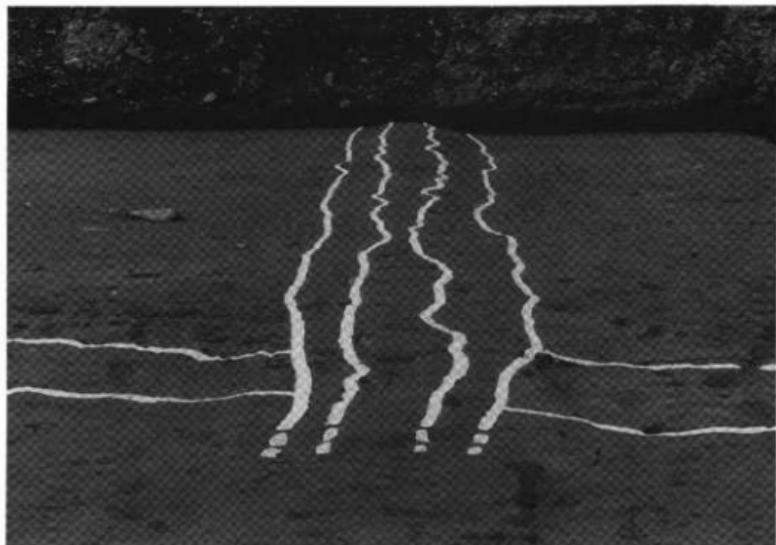
調査地全景（東方より）



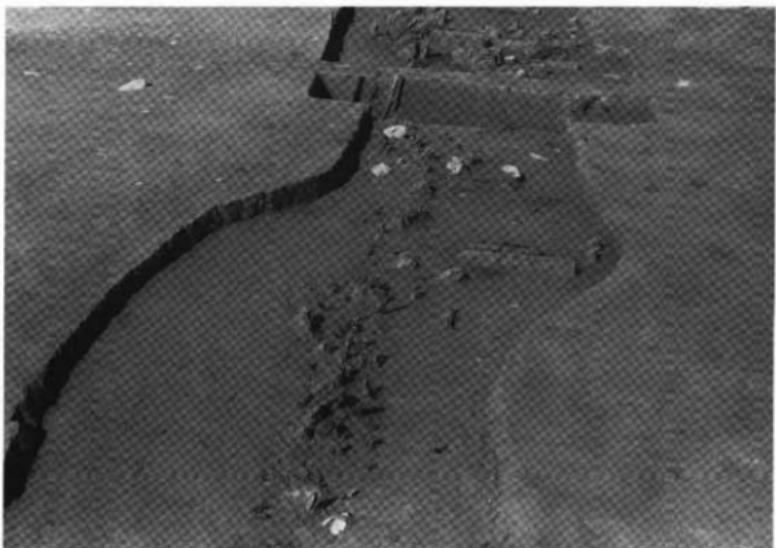
トレンチ土層堆積状況



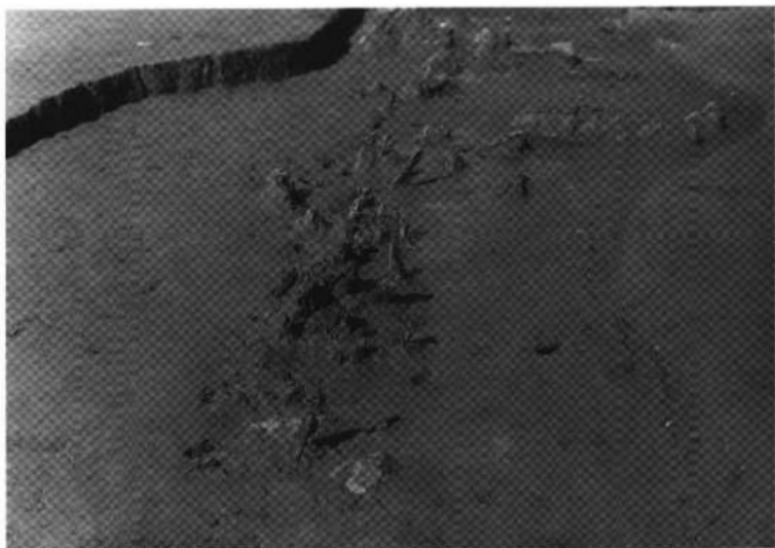
畦畔状遺構及び木杭列遺構



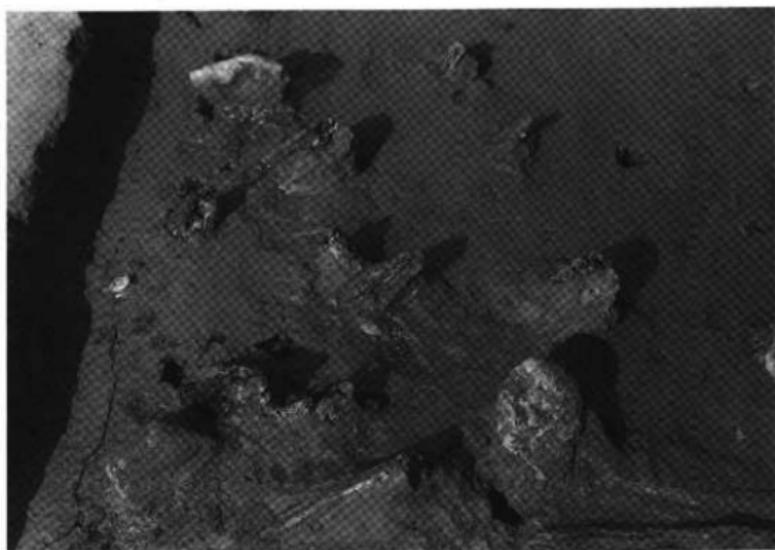
畦畔状造構



木杭列検出状況！



木杭列検出状況 2



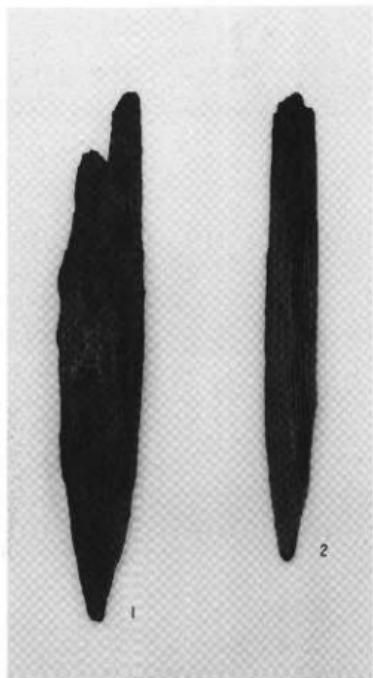
木杭列検出状況 3



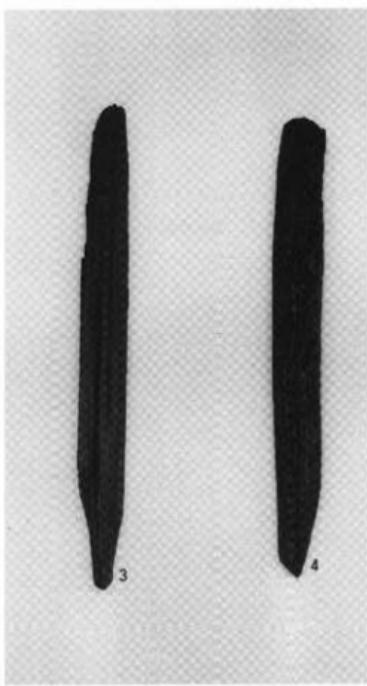
木杭列検出状況 4



木杭打ち込み状況

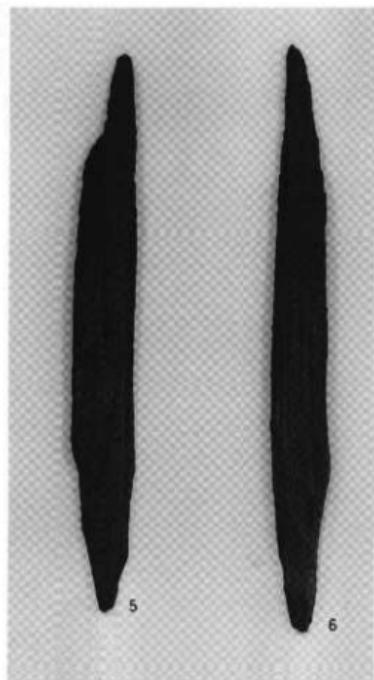


出土木杭 1

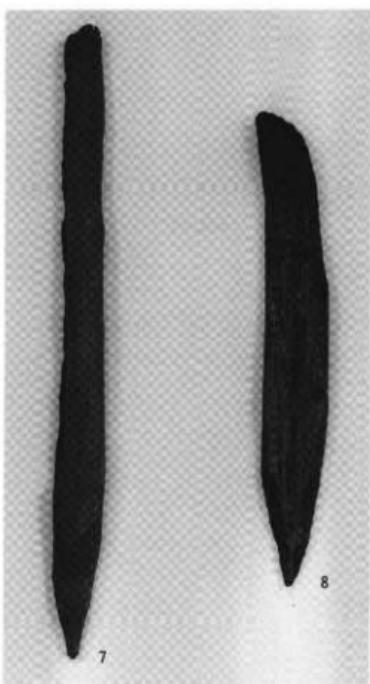


出土木杭 2

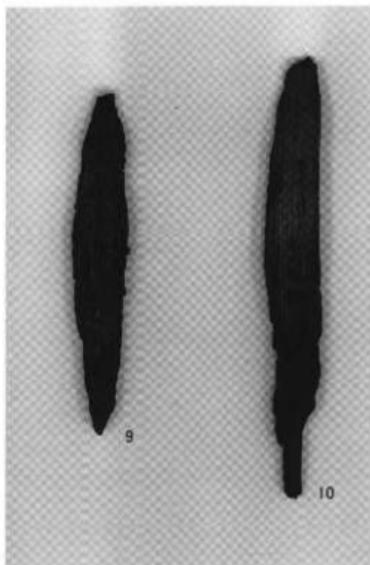
図
版
8



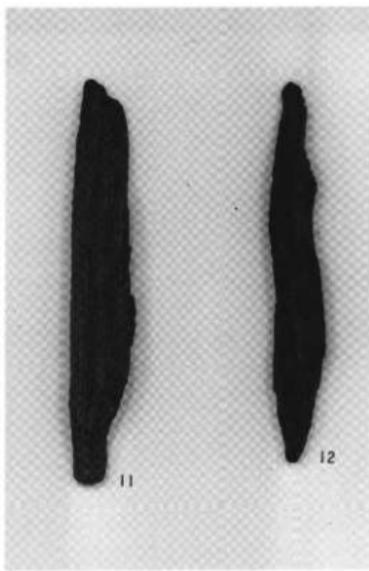
出土木杭 3



出土木杭 4



出土木杭 5



出土木杭 6



調査協力者

箕輪遺跡

箕輪町公共下水道事業終末処理場沈殿池増設工
事に伴う埋蔵文化財第10次緊急発掘調査報告書

印 刷 発 行 1997年3月21日

発行所 長野県上伊那郡箕輪町教育委員会
長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地

印刷所 日本ハイコム株式会社
長野県塩尻市北小野4724
